

「融合寺院」とは何か：

聖地ヴァーラーナシーにおけるヒンドゥー教寺院を核とした増築現象について

名城大学理工学部建築学科・准教授 柳 沢 究

1 はじめに

本研究はインド、ウッタル・プラデーシュ州の聖地ヴァーラーナシー Varanasi の旧市街において観察される、既存のヒンドゥー寺院を核とする増築現象「融合寺院」を対象に、建築的実態の調査と当該建築の住民へのインタビューを通じて、その概要を把握しようとするものである。具体的には、ヴァーラーナシー旧市街中心部にあるヴィシュワナタ寺院を含む一体を調査エリアとして、融合寺院の数と分布、通常のヒンドゥー寺院との割合、形態的バリエーションとそれに影響する条件、形成プロセスや背景、寺院に対する住民の意識、内部空間と使われ方の特徴などについて検討を行う。

「融合寺院」とは、元々独立して建つ寺院が、隣接する建物の増築または新築によって、部分的/全体的に包含される現象、およびその結果形成された建築物を指す、著者による呼称である。ヴァーラーナシーには数多くのヒンドゥー寺院があるが、後述するように、その少なくない部分が融合寺院となっている。母体となる寺院には、必ずしも格別な宗教的重要性や建築の特徴があるわけではない。現地においてはありふれた現象であるため等閑視されており、これに触れる既往研究は、著者らによるものを除けば、インド内外を問わず管見の限り見られない。しかしながら、融合寺院という現象は様々な点において興味深い示唆を含んでいる。その意義については本稿では深く立ち入らないが、以下の3点を挙げておきたい。①インド文化あるいはヒンドゥー教における聖性と建築の関係：一般に神々を祀る寺院などの建築物は聖なる存在と捉えられているが、それが様々に改変されたり世俗的建築と複合化することはどのような意味をもつのか。②都市空間の変容過程をたどる手がかり（定点）：融合寺院となった寺院はそこに存在し続けている。③時間的重層性を備えた都市空間形成手法としての可能性：スクラップ・アンド・ビルドではなく過去の建設の上に新たな建設を重ねさせることにより、融合寺院は都市の記憶を物理的に継承・蓄積していく仕掛けとして作用しているのはいか。建築学を専門とする著者にとっては、とりわけ第3の点への興味が深い。しかし、どのような意義を有するにせよ、未だほとんど注目されたことのない融合寺院という現象について、その実態を様々な視点から少しでも明らかにすることが本稿の目的である。

2 ヒンドゥー寺院と「融合寺院」

2-1 ヴァーラーナシーのヒンドゥー寺院

本稿におけるヒンドゥー寺院とは、その構造や規模に関わらず、ヒンドゥー教の神々を祀る施設を指す¹。必要に応じて「寺院」と「祠」を区別して論じる際には、人が入り祭儀を行うことが可能な

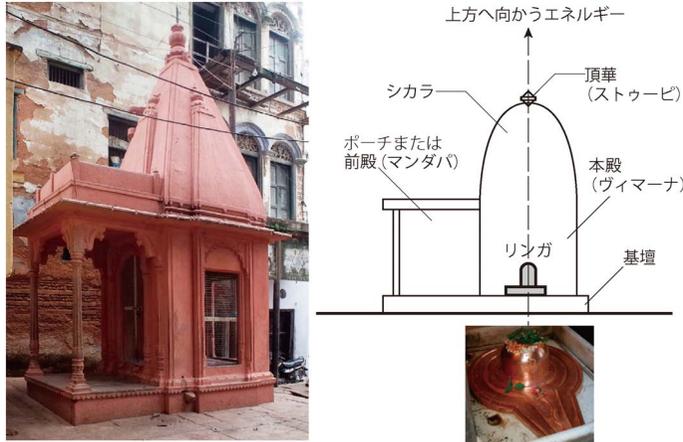


図1 ヴァーラーナシーのヒンドゥー寺院の基本的な構成

内部空間を持つものを「寺院」、人の入れない小規模なものを「祠」と呼ぶ。基壇の上に本殿（ヴィマーナ）が載り、その前方にポーチが付くのが、ヴァーラーナシーにおける小規模なヒンドゥー寺院の一般的構成である（図1）。ポーチが省略される、あるいはポーチの代わりに壁で囲われた前殿（マンダパ）が附属する場合もある。本殿内部の聖室（ガルバグリハ）には神像（シヴァ神を祀る場合はリンガ）が据えられる。聖室の上部構造であるピラミッドあるいは砲弾状の屋根は、シカラと呼ばれる。サンスクリット語で「頂」の意である。寺院は聖なる山と同一視され、聖室の中心部とシカラの頂部にある頂華（ストゥーピ）を結ぶ垂直軸は、聖なるエネルギーの上昇運動を象徴する²。それゆえ、現地の聖職者へのヒアリングによれば、寺院の頂華を他の建築物によって覆うことは、避けるべきこととされている。

2-2 融合寺院の判定条件

「融合寺院」とは、独立して建つヒンドゥー寺院があり、それに隣接する建物の増築または新築によって、両者が部分的/全体的に融合する現象である。また、その結果形成された（と考えられる）建築物（図2, 3）である。ヴァーラーナシー旧市街中心部を対象とした臨地調査³では、調査範囲内の全街路を歩き、ヒンドゥー寺院を目視で確認し、位置を記録するとともに写真撮影を行った。立地上また融合寺院の特性上、街路から視認しにくい寺院も少なくないため、同時に寺院の位置が記載された1929年製の都市地図を手がかりとして、周辺住民への聞き取りを行いながら寺院を確認した。

¹ 建物の一室に神像が祀られているものや、壁面のニッチに神像を祀っているもの、神像が露天に置かれ、構造物を持たないものも含んでいる。

² ミッチェル：1993, pp. 85-87、小倉 泰：1999, pp. 263。また寺院竣工時の儀式では、頂華を人体頭頂部に擬して灌頂の儀式が行われる（小倉 泰：1996）。

³ 臨地調査は、2013年9月12～23日および2014年8月23日～9月7日に実施した。調査者：2013年/柳沢・小原亮介・大村祐以・西原早紀・奥田隆太郎、2014年/柳沢・小原・山本将太・長屋美咲・渡辺愛理。

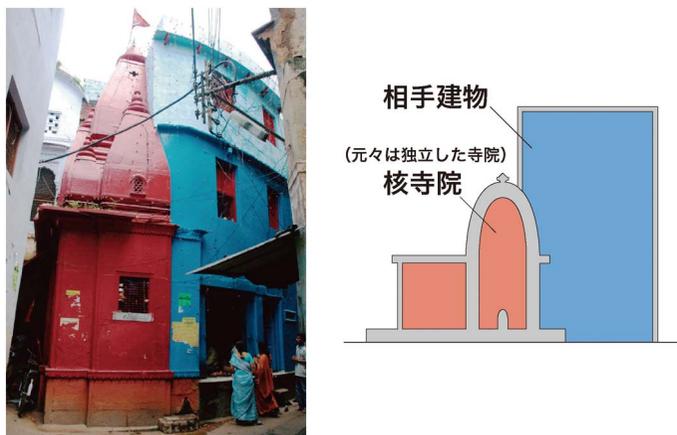


図2 融合寺院の典型例と概念図

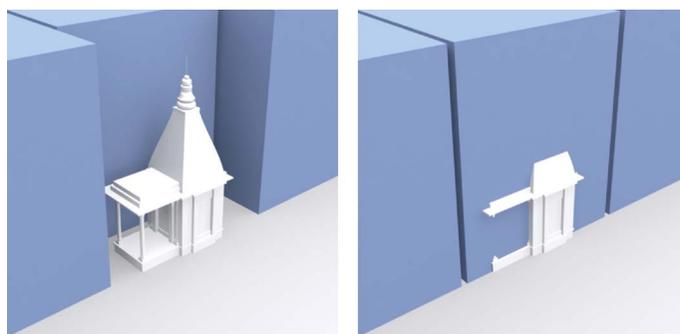


図3 融合寺院化のプロセス模式図（図版製作：小原亮介）

それらのヒンドゥー寺院のうち、次の4条件をすべてを満たすことを確認したものを融合寺院と判じた。①形態的な相貫：融合の核となる寺院と融合する相手の建物（以下「核寺院」「相手建物」とする。図2）が、空間・外観形態上、壁厚以上に重なり合っている。②核寺院の自立性：相手建物を仮に除去しても核寺院が構造的・空間的・形態的に自立する。③相手建物の依存性：核寺院を仮に除去すると相手建物が構造的・空間的に自立しない。④相手建物の空間性：相手建物が壁・屋根等により覆われた恒久的内部空間を有する（寺院の周囲を塀が囲んでいるだけのものや、寺院の外壁に仮設的な屋根を差し掛けただけのものは除外する）。

2-3 融合寺院の数と分布

現地調査では、530件のヒンドゥー寺院が確認された。それらの寺院のうち、融合寺院及びニッチや露天に神体が置かれている寺院などを除いた、建築的に独立している形態を持つ寺院、すなわち将来的に融合寺院となりうる可能性のある寺院（以降「独立寺院」とする）は245件である。それに対して、融合寺院と判定されたものは155件であった（図4）。独立寺院と融合寺院の数の比率は61：39となる。融合寺院が過去のある段階まで独立寺院であったとすれば、ヴァーラーナシーの調査範

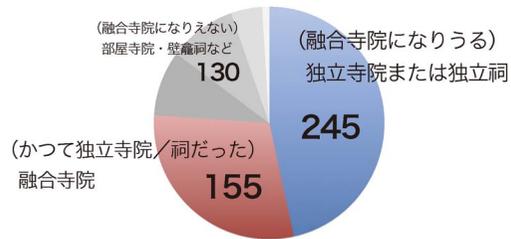


図4 調査地におけるヒンドゥー寺院の数と割合

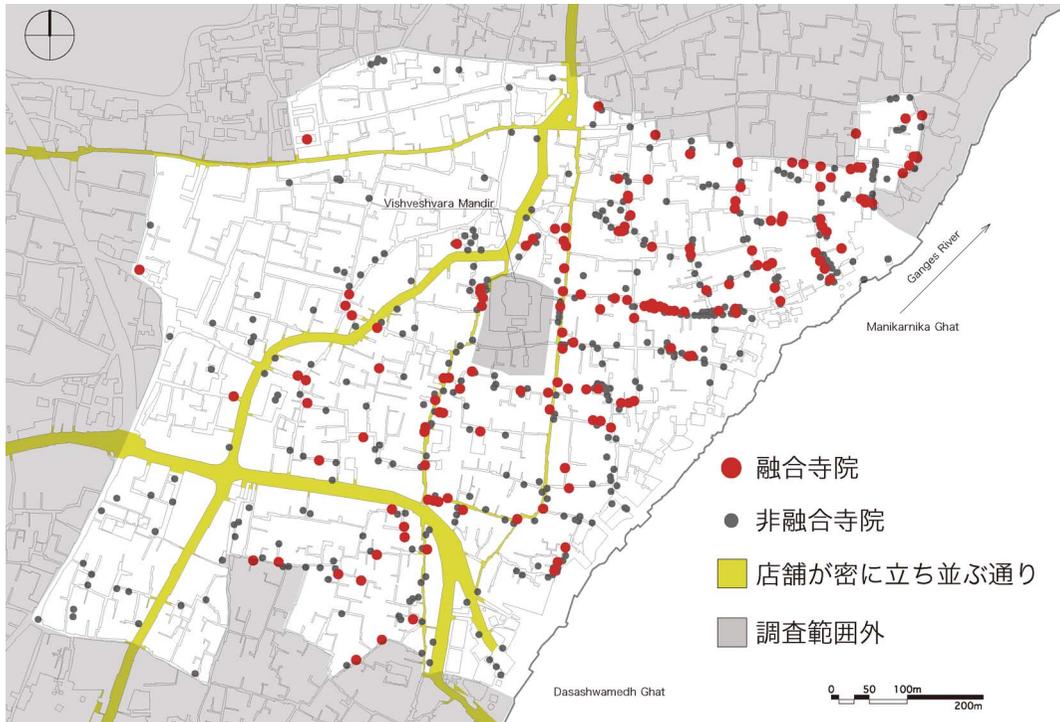


図5 ヒンドゥー寺院と融合寺院の分布

囲にある（あった）独立寺院のうち、約4割が融合寺院となっていると考えることができる。

上記の調査により得られた寺院分布図（図5）から読み取ることができる融合寺院の分布の特徴は、次の2点である。①調査範囲北西部はムスリムが多く居住する地域であり⁴、そこにはヒンドゥー寺院自体が少なく、従って融合寺院の数も少ない。また南西部の一角では融合寺院がほとんど見られない。それ以外の地域では、融合寺院は概ね均等に分布している。②店舗の建ち並ぶ繁華な通り沿いでは、融合寺院が比較的多く分布する。高密度の商業地域であるために、床面積を増すことへの要求が強く、その結果融合寺院化が促進されている可能性がある。

⁴ 柳沢：2004, pp. 79。

3 融合寺院の形態的類型と核寺院の建築および立地の形式

3-1 融合寺院の4類型

融合寺院における核寺院と相手建物の融合の度合いを検討するために、確認された融合寺院155件について、「頂華を被覆する融合であるか否か」「平面的な融合の程度」という2つの指標を用いて、融合寺院の形態の類型化を行った。前述したように頂華はヒンドゥー寺院において重要な象徴性を担う要素であり、頂華を覆うか否かは、寺院の聖性や象徴性への対応態度として決定的な相違と見なしうるためである。以上の分類により、次のA～Dの4類型を得た（図6）。

①A型＝頂華露出/平面部分型：全類型中最も数が多い（45%）。頂華が露出し、核寺院の元々の外観が大部分維持されており、融合の度合いは低い。清掃の痕跡や供物が観察され、活発に使用されていると思われる寺院の多くは、このタイプに含まれる。②B型＝頂華被覆/平面部分型：上部構造が隠れ壁の一面だけが露出しているタイプと、寺院外観を大部分現すが頂華近傍のみ被覆しているタイプの2種が見られる。③C型＝頂華露出/平面全体型：聖室を含む寺院の平面全体が包含されているが、シカラ上部だけは露出しているタイプ。頂華開放の教義に従う明確な意識が見られる一方、核寺院が占有物であるという意識も伺われる。④D型＝頂華被覆/平面全体型：上部構造を含む核寺院全体が相手建物に完全に包含されているタイプ。全類型中融合の度合いが最も高い。寺院の占有あるいは上層階を含む床面積増大の要求など、融合を推進する力が強く働いているケースと考えられる。

寺院の4割が融合寺院になっているとはいえ、その半数近くは核寺院と相手建物の一部が重なる程度の融合度合いが低いもの（A型）である。寺院の頂華部分を覆うことは教義上避けるべきとされているにも関わらず、融合寺院のうち29%（B・D型）もの事例で頂華を含んだ融合がなされていることは注目される。C・D型は寺院を丸ごと包み込む高次な融合形態であるが、あわせて38%と高い比率を示している⁵。全体として見れば、融合の程度の低いものと、強く融合をしているものが半々程度存在していることがわかる。

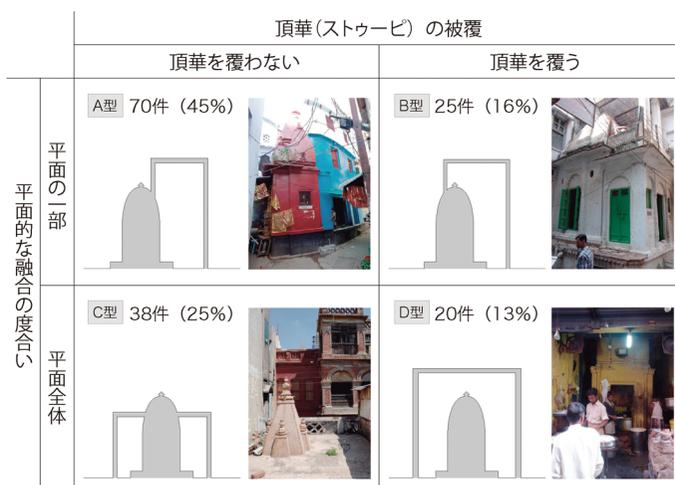


図6 融合形態の4類型（図版製作：小原亮介）

3-2 建築形式別に見た融合寺院

寺院の建築形式が融合寺院発生に与える影響を検討するために、融合寺院の核寺院、および融合寺院となる可能性のある独立した構造をもつ寺院・祠（以下「独立寺院」「独立祠」とする）を対象に、その建築形式を7種に分類し、各形式について〈該当する形式の（非）融合寺院の数/（非）融合寺院の総数〉を算定し比較検討を行なった⁶（図7）。また、前述の融合形態の4類型との関連を検討した（図8）。その結果、以下のようなことがわかった。①寺院の建築形式は「基本型」と「無前殿型」が全体の7割弱を占めており、多くの寺院が図1に示したヒンドゥー寺院の基本構成に則って建てられている。融合寺院の核寺院に限ると、ほぼすべてが「基本型」「無前殿型」である。②基本構成から外れた形式をとる寺院は融合寺院となっているものが少ない。

これは特殊な建築形式をとる寺院は、比較的宗教的重要性の高い寺院が多く、それゆえに融合寺院になりにくいと推測される。③なかでも「無シカラ型」はとりわけ融合寺院になりにくい傾向が見られる。「無シカラ型」のほとんどは比較的近年建設されたRC造・陸屋根の寺院であるため、寺院の築年数が融合寺院となる条件に關与していることが伺われる。④祠は寺院に比べて融合寺院となりにくい。

建築形式	基本型		無前殿型		無シカラ型		前殿シカラ付属型		双子/対面型		群集型	
概略図												
種別	独立寺院	独立祠	独立寺院	独立祠	独立寺院	独立祠	独立寺院	独立祠	独立寺院	独立祠	独立寺院	独立祠
該当する融合寺院件数	62	3	58	16	1	0	0	1	3	0	2	0
該当する非融合寺院件数	55	8	49	63	14	15	7	0	8	1	4	4
該当する融合寺院件数 総数（元独立寺院:132、元独立祠:23）	47%	13%	44%	70%	1%	0%	0%	4%	2%	0%	2%	4%
該当する非融合寺院件数 総数（独立寺院:154、独立祠:91）	36%	9%	32%	69%	9%	16%	5%	0%	5%	1%	3%	0%
融合寺院のなりやすさの判定 （○高傾向 × 低傾向 △傾向なし）	○	△	○	△	×	×	×	△	△	△	△	△

図7 建築形式からみた融合寺院のなりやすさ

建築形式	基本型	無前殿型	無シカラ型	前殿シカラ付属型	双子/対面型	群集型
A(全70件)	33 (47%)	33 (47%)		0	1 (1%)	2 (3%)
B(全25件)	7 (28%)	15 (60%)		1 (4%)	0	0
C(全38件)	19 (50%)	15 (39%)		0	0	0
D(全20件)	6 (30%)	11 (55%)		0	2 (10%)	0

図8 建築形式と融合形態4類型

⁵ C・D型は外観のみでは一見して融合寺院と判断することは困難であるため、調査の際にその全てを確認できたとは限らない。実際にはもっと多くの事例が存在する可能性もある。

⁶ 例えば「基本型・独立寺院」の項目では〈核寺院が基本型・独立寺院の融合寺院の数62/核寺院が独立寺院の融合寺院の総数132〉=47%と、〈基本型・独立寺院（非融合）の数55/独立寺院（非融合）の総数154〉=36%とを比較することで、基本型・独立寺院の融合寺院への転換のしやすさを測っている。

3-3 立地形式別に見た融合寺院

融合寺院の立地特性に注目して、前項と同様に、比較的良好に見られる4形式に分類し比較検討を行った結果、以下の事が判明した(図9, 10)。①独立寺院と独立祠計245件のうち約30%(74件)が「門前型」であり、その内訳は独立寺院23件、独立祠51件である。②「門前型」は融合寺院となり易い傾向がある。特にB型の融合形態をとるものの多くは元々「門前型」であったと考えられる。③「囲繞型」は融合寺院になりにくい傾向があるが、融合寺院となる場合は元々塀や柵で囲まれているというその立地形式上平面的に囲まれる類型であるC型になり易い。

本章では、融合寺院の数や分布、ヒンドゥー寺院全体に占める融合寺院の割合、融合形態の種類、またそこに寺院の建築形式や立地形式がどのように影響しているかを検討した。注目すべき点としては第一に、独立した建築形態を有する寺院のおよそ4割が融合寺院となっていることである。寺院建築に世俗的建築を重層的に増築するという行為が、当地においてはありふれた現象であることがわかる。融合の形態の種類からは、融合の程度が高いものと低いものが段階的に存在していることがわかる。融合の形態やその程度には、元々の寺院の建築形式や立地形式が一定程度影響していると考えられるものの、その比重は大きくない。分布状況において繁華な商店街に比較的融合寺院が多く立地する傾向が見られたことから、開発圧力(床面積増大の要求)の大小が大きな要因として働いていることが伺われる。「無シカラ型」に代表される比較的築年の浅い寺院の融合寺院がほとんど見られなかったように、寺院の築年数もまた重要なファクターであろう。

立地形式	門前型		中庭型		囲繞型		高基壇型	
概略図								
種別	独立寺院	独立祠	独立寺院	独立祠	独立寺院	独立祠	独立寺院	独立祠
該当する融合寺院件数	45	12	5	0	9	1	20	0
該当する非融合寺院件数	23	51	10	3	18	1	20	2
該当する融合寺院件数 総数(元独立寺院:132、元独立祠:23)	34%	52%	4%	0%	7%	4%	15%	0%
該当する非融合寺院件数 総数(独立寺院:154、独立祠:91)	15%	56%	7%	3%	12%	1%	13%	2%
融合寺院のなりやすさの判定 (○)高傾向 × 低傾向 △傾向なし	○		△		△		△	

図9 立地形式からみた融合寺院のなりやすさ

建築形式	門前型	中庭型	囲繞型	高基壇型
A(全70件)	22(29%)	1(1%)	0	11(16%)
B(全25件)	11(44%)	0	0	0
C(全38件)	13(34%)	3(8%)	10(26%)	7(18%)
D(全20件)	9(45%)	1(5%)	0	2(10%)

図10 立地形式と融合形態4類型

4 「融合寺院」の居住者へのインタビュー

4-1 インタビュー調査の概要

融合寺院の分布調査において確認された融合寺院のうち、特に融合の程度が顕著な事例や典型的な融合形態を示す事例を選出し、融合寺院の形成にいたる背景と寺院への意識を探るために、寺院の居住者に現地通訳者を介した対面形式のインタビューを実施した（全14件）⁷。インタビューの項目と回答の要旨は図11の通りである。以下に、全インタビューを通して得られた知見を項目別にまとめる。

4-2 対象者および建物のプロフィール

(1) 所有関係

12件において、居住者またはその家族が融合寺院＝母体となる核寺院および融合の相手建物双方

No.	インタビュー対象者について				相手建物について		核寺院について			
	所有	職業	宗教	カースト	用途	居住年数	祭祀	開放性	寺院に関するタブー	融合の経緯
①	所有	占星術師	H	バラモン	住居	曾祖父の代から	自分/家族	パブリック	寺院の上に建物を造ること	初めからこの状態であった。
②	所有	仕立屋	H	非バラモン	住居・店舗	曾祖父の代から	自分/家族	プライベート		祖父の代にもともとバラモンの家だったものを買った(土地+家+寺の状態)。その後少しずつ増築を重ねて現在の状態に。
③	所有	政治家	J		住居・事務所	5～6年前から	北側の寺院は近隣店舗3軒が共同	北側はパブリック	寺院のシカラを覆うこと	5～6年前に現在のように寺院を覆う形で新しい家を作った。寺院のシカラを覆うかわりに、屋上にもう一つシカラを作った。
④	所有	建材商	H	バラモン	住居・店舗・倉庫	200～300年前から	自分/家族	プライベート		年代は分からないがずっと前から寺院が建物の中に入っており、2階にはシカラが貫通していた。2000年にバルコニーや階段をつくる際に、その屋根もとってしまった。
⑤	所有	サラー商	H	バラモン	住居	祖父の代から	バラモンである下宿人/祭礼時は自分	プライベート	本殿の上部に増築すること(前殿の上部は問題ない)	祖父が1950年頃に移住してきた際、寺院のある土地を買いバラモンとして生活を始め、その後土地を買い足していった。相手建物は80～90年前のもので、増築を何度か行っている。前殿上部の増築は70～80年前。前殿の上部に載せているわけではなく、前殿との間には隙間がある。
⑥	所有	エンジニア	H	非バラモン	住居	1978年から	自分/家族	プライベート	月経中の女性の本殿内立入り。シカラに手を加えること。野菜以外を食べること。アルコール。本殿内に何かをつくること	1978年の転居時に、複数ある本殿の間に屋根を架け、床を設けた。周囲を囲う壁と南側の増築部は当時から既にあった。トイレが無かったのでバラモンに相談し南側に作った。南の外側の部屋にはバラモンが住んでいたが、その後店舗にした(いまは倉庫)。
⑦	所有	薬商	H	非バラモン	住居	高祖父の代から	自分/家族	プライベート	肉や魚を扱うこと。シカラ上部を増築で覆うこと	現在寺院を包んでいる建物は元々はL字型で独立して建てていた。1950年に父が2階を増築し寺院が包まれる状態になった。2006年に3階を増築した。2階にシカラをなるべくオープンな状態にするための開口部を設けている。
⑧	所有	乳製品商	H	非バラモン	住居	150～200年前から	自分/家族/祭礼時はバンディト	パブリック	肉・魚・卵を使う・食べる	寺院の内壁をタイル貼にしたり、木の扉を鉄製に変えたり、外壁のペンキの塗り替えを行なっている。住居部の建物が寺院上に覆いかぶさっている状態は、昔からである。
⑨	所有	装飾業	H	不明	倉庫・住居	不明	自分/家族/祭礼時はバンディト	プライベート	寺院の上部に部屋があること。肉や魚、玉ねぎ、にんにくを食べること	もともと寺院と住居は分かれていた。70～80年前に家の前から神像が掘り出され、祖父が住居の前面に寺院をつくり記った。少なくとも25年前に住居を増築して寺院を室内化した。今室内にある祠は数年前に作った。神像は昔のまま。寺院の変化は以下の流れの通りと考えられる。
⑩	所有	アクセサリ商	H	バラモン	住居・店舗	2010年から	店舗の賃借人	プライベート	寺院の屋根に手を加えること	建物は少なくとも300年以上前のもの。1984年に父が購入した当時寺院はこの(融合寺院の)状態であった。当時はぼろぼろだった。元々はある地方の王の所有だった。
⑪	所有	デザイン業	H	不明	住居	2年前から	自分/家族	プライベート		2年前に土地・建物を購入し移住した。当時から寺院が室内にいくこんでいる状態であった。
⑫	賃借	大学院生	H	バラモン	学生寮	1994年から	学生たち	パブリック		不明
⑬	所有	土産等の小売店	H	不明	住居	45年ほど前から	自分/家族	プライベート	肉や魚を食べること。誰かが亡くなった際に訪問者を家に入れること	もともと寺院だけが有り、購入し転居してきた時に、寺院を覆うように家をつくり現在の状態となった。門の部分は最初からあった。寺院を取り壊したり移動することは考えなかった。
⑭	賃借	生命保険・小麦粉の売買	H	不明	住居	2002年から	自分/家族	パブリック		住み始めた時から寺院は覆われた状態であった。2階部分は後から作られた。

図11 居住者へのインタビュー結果の概要

⁷ 本稿で扱うインタビュー調査14件は、2013年9月12日～23日に実施した。

の所有者であった。核寺院と相手建物が区分所有されている形跡は、管見の限り見られなかった。個人所有されている核寺院には、高名な巡礼路の一部である寺院や、数百年前には王族が所有していたと伝えられる寺院も含まれている。

(2) 職業およびカースト

居住者の職業は仕立屋・政治家・サリール商など多様であり、一定の傾向はない。居住者または所有者のカーストを確認できた10件のうち、バラモンに属するのは5件であった。融合寺院の核となっているヒンドゥー寺院は、必ずしもバラモンによって所有されていないことが確認された。またジャイナ教徒が寺院を含む所有者である事例も確認された(図11③)。

(3) 建物の用途

全ての事例で、核寺院は神体を有し寺院機能を維持している。また全ての事例において相手建物の用途は、店舗や事務所と複合する場合もあるが、主として住居である。このことから、これらの融合寺院は居住空間を拡張する目的の増築の結果生じた可能性が高いと考えられる。

(4) 居住年数

いつから現在住む地に一族が住んでいるかを尋ねると、約半数の事例では「曾祖父の代から」「100年前」といった、とにかく昔から住んでいるという曖昧な回答であるが、残りの半数では比較的近年に寺院付きの土地(建物)を購入し移住してきている。ヒンドゥー寺院が含まれた土地や建物の売買は、現在でも一般に行われていることがわかる。

(5) 融合寺院化の経緯

融合寺院に至る具体的な経緯についてインタビューから得られた情報は多くない。しかし3件の事例で、対象者の祖先が元々独立していた寺院を増築により融合寺院化したことが語られ(図11②⑤⑦)、また6件の事例では対象者自身が増築による融合寺院化に関与している(図11③④⑤⑥⑨⑬)。これらの年代は、数年前から百年近く前にわたり、融合寺院という現象が、特定の年代によらず、継続的に生起していることがわかる。

4-3 核寺院に対する意識・扱い

(1) 寺院での祭祀

居住者または所有者がバラモンではない場合を含む12件の事例において、核となるヒンドゥー寺院での日常的な祭祀(プージャ)は居住者自身やその家族で行っている。シヴァラートリー等の大祭礼時には高僧を招き特別なプージャを行うこともあるという(図11⑧⑨)。一方で寺院の管理や祭祀を近隣や店子の店舗の人々に委ねて、居住者/所有者が寺院の運営にほとんどタッチしない事例も確認された(図11③⑩)。

(2) 寺院の外部への開放性

「寺院はプライベートかパブリックか」と尋ねると、大半の事例で「プライベート」=居住者のための寺院であり、積極的に公開していないとの回答が得られた。「パブリック」である寺院は街路に対して積極的に門戸に開いている。ただし「プライベート」な寺院でも、外部から参拝依頼があった際にそれを拒否することはないという。

(3) 寺院に関するタブー

7件の事例で、寺院あるいはシカラの上部に建物を作ってはいけないという主旨の言及があり、ヒンドゥー寺院の本殿上部を建築物で覆うことはタブーであるとの認識が、ある種の通念として共有されていることがわかった。しかし実際には、多くの融合寺院において寺院の上部は増築された建物で覆われている。その矛盾に対して居住者は、「(増築部とシカラは) ちょうど触れているだけで覆いかぶさってはいない」「人が生活する部屋ではなく倉庫である」といった説明を加え問題無いとする。また寺院のシカラ上部を塞いだ代わりに新しいシカラを屋上に新設する、といった代替措置がとられているケースも見られた(図11③)。シカラ上部への建設がタブーであることは共通に了解されているが、その解釈は人によって異なりうる幅の広いものであることがわかる。

寺院が生活空間の一部になっている状況に伴うタブーとしては、肉・魚・ニンニク等不浄に属する食の禁忌とともに、少数ではあるが月経時の女性や死の不浄の立入りについての言及があった(図11⑥⑬)。

今回のインタビューで確認された注目すべき事実を、一見自明のものも含め改めて以下にまとめる。
①元々独立して建っていた寺院が周囲の建物の増築の結果「融合寺院」となった、という経緯があらためて確認された。
②融合寺院の多くは個人所有されており、また核寺院と相手建物は一体的に所有されている。また寺院は土地とセットで売買されている。
③寺院の所有者は必ずしもバラモンではない。またジャイナ教徒の所有者もいる。
④核寺院は寺院としての機能を維持しており、相手建物の主たる用途は住居である。
⑤バラモンではない居住者も寺院の祭祀を行なっている。また近隣に寺院の管理が委ねられる場合がある。
⑥融合寺院でも寺院への参拝は基本的に拒否されない。
⑦シカラ上部への建設はタブーという通念があるが、その解釈には幅がある。
⑧不浄の食物や血・死の穢れの禁忌が寺院と関連して意識されている。
⑨融合寺院は少なくとも百年近く前から近年まで継続的に生起している現象である。

5 内部空間および使われ方の特徴

5-1 建物の実測および使われ方調査の概要

よりミクロな視点で融合寺院の実態を明らかにするため、その内部空間の構成と使われ方の特徴について考察する。先述した旧市街中心部を対象とした寺院の悉皆調査を通じて観察された融合寺院もしくは融合寺院になりかけている典型的な事例について、許可を得られた場合に限り平面図・断面図の実測および写真撮影を行った。合計27件の実測調査を行い、その中から特徴的な事例をまとめて報告する。以下では調査で確認された件数を付記するが、いずれの現象も程度の差はあれしばしば観察されるものである。

5-2 融合寺院の特徴的な空間

(1) 参拝者への配慮

融合の程度にもよるが、融合寺院は街路から寺院の存在を視認しにくいものが多い。そのような状

況に対して7件の事例で、壁ではなく鉄の柵で寺院を囲んだり開口部を設けたりして、街路から寺院が見える工夫を意図的に行っていることが確認された。これは公共性を帯びた寺院を私的に占有してしまったことへの代替措置としての対応と考えられる。図12の事例ではフェンスにより入口から寺院が見通せるようになっている。また、前殿部を室内化したかわりに北側の開口からも本殿内部に礼拝できるように工夫されている。

(2) 寺院領域の拡張

寺院が住居に包含されたタイプの融合寺院では、寺院が雑多な生活空間の中に溶け込んでいるケースが少なくない。しかし7件の事例では、寺院のある空間が祭祀専用の場として他の生活空間から区画されていた(図13)。その空間には神具や祭祀に用いる道具のみが置かれ、寺院の延長の領域として扱われている。寺院を住居で包含しながらも、どうか寺院の聖性を維持しようとする意思の反映と考えられる。

(3) 歪められた生活空間

融合寺院という現象が社会的にある程度許容されている一方で、寺院建築にはなるべく手を加えるべきではないという通念も強くある。それゆえ生活空間の中に寺院が取り込まれた場合、その寺院の物理的存在が生活の利便性に優先し、生活空間が歪んでいる場合は少なくない(4件)。図14の事例では、2階に貫通したシカラの周囲に窮屈そうにキッチンが配置されている。

(4) 寺院周囲の仮設的空間化

仮設的空間化とは、寺院周囲に小屋掛けをしたり波板や布などをを用いた仮設的な屋根や壁により空間化している状態のことを指し、5件が確認された。図15の事例では寺院周囲に波板で覆いを作り、布で空間を仕切り生活を営んでいる。このような状況は寺院に隣接する建物の住人の生活空間が拡張された結果生じたものである⁸。この状態は2-2で述べた融合寺院の判定条件④(仮設的小屋掛けや塀囲いとの区別)を満たさず、したがって融合寺院とはいえない。しかし、もし将来的に布や波板

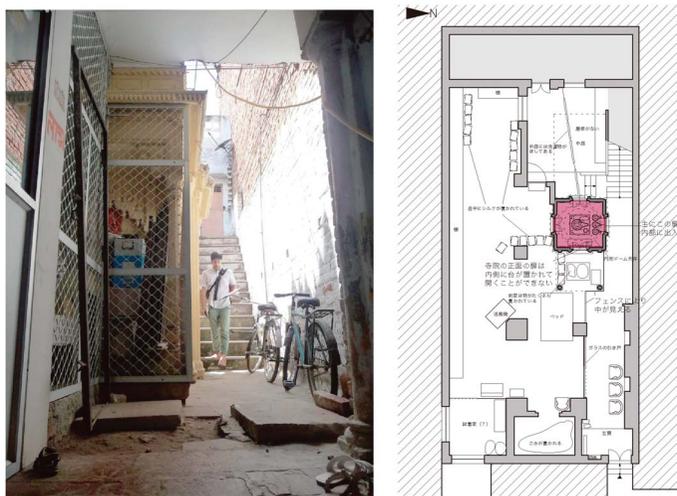


図12 参拝者への配慮(図版製作:山本将太)



図13 寺院領域の拡張（図版製作：山本将太）

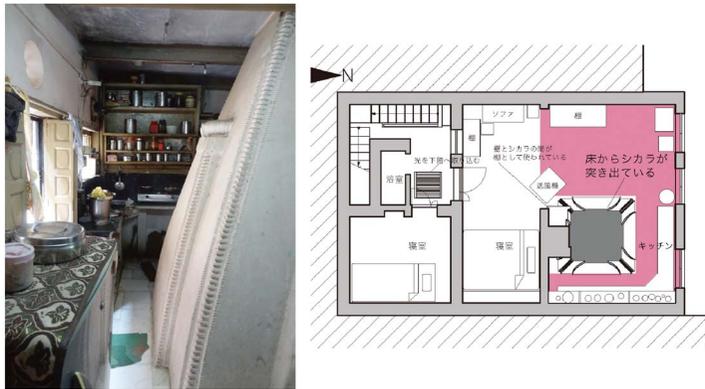


図14 寺院により歪められた生活空間（図版製作：山本将太）

などの仮設的な素材がレンガや石などの恒久的な素材に置き換えられ、本格的な空間化がなされるとすれば、条件④を満たし融合寺院となる。つまりこの状況は、融合寺院に至る中途段階を示していると考えられる。

5-3 融合寺院の特徴的な使われ方

(1) 本殿内部の利用

融合寺院の中には、神体の納まる本殿内部さえも居住空間や店舗として利用される事例がある（6件。うち5件は店舗）。いずれも神体は残されている。このような状況は寺院の聖性の観点からは好ましくないと認識されているが、実用上の要求が勝った結果としてしばしば見られる（図16）。

(2) シカラ/頂華の開放

先に述べた通りシカラおよびその先端の頂華はヒンドゥー寺院において極めて重要な意味をもつた

⁸ 他の事例では、寺院を管理するパラモンが寺院周囲に住むために、このように寺院の周囲を仮設的に空間化したケースも確認されている。

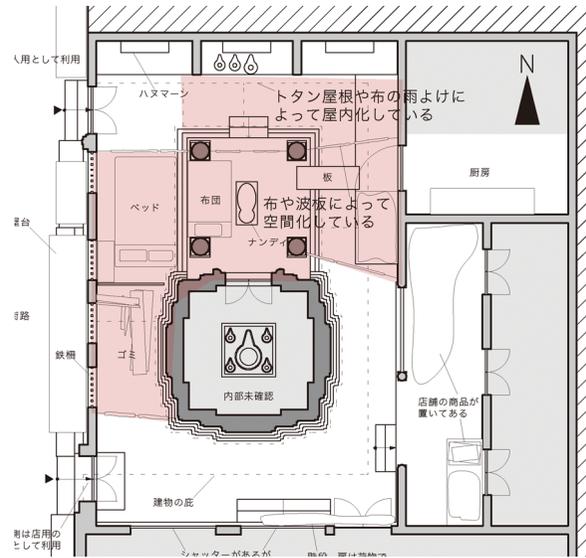


図15 寺院周囲への仮設的増築（図版製作：山本将太）

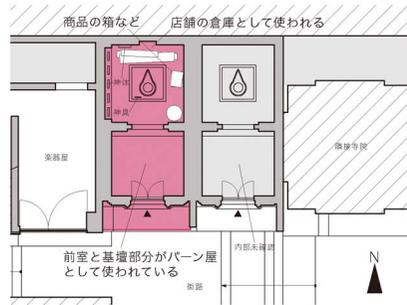


図16 本殿内部の使用（図版製作：山本将太）

め、増築する際にもシカラ（少なくとも頂華）を覆うべきではないとされている。そのため融合寺院にはシカラを外部に開放するためのさまざまな工夫が見られる（7件）。図17（左）は本殿と前殿は完全に室内化されているが、シカラのみを屋上に露出させている。図17（右）はシカラの周囲を階段が覆っているが屋根は無く、かろうじて頂華は上空に開放されているものである。

（3）寺院躯体の即物的利用

前述したように、寺院建築（特にシカラ）に手を加えることを忌避する傾向がある一方で、図18のように上階の梁を支える構造体として利用したり、シカラに棚をつくりつけたり、邪魔な柱を一部除去するなど、寺院建築を即物的に扱う例はしばしば確認される。

本章ではヴァーラーナシーの旧市街に観察される融合寺院の内部空間と使われ方の特徴についてを考察した。これらの現象はいずれも融合寺院という、聖なる寺院と日常生活空間が併存する状況に



図17 シカラ、頂華の開放



図18 寺院躯体の即物的利用

おける、寺院の聖性を維持または尊重しようとする要求と生活上の実用的要求とのせめぎ合いの結果として生じていることがわかる。「参拝者への配慮」「寺院領域の拡張」「歪められた生活空間」「シカラ/頂華の開放」などの特徴は、寺院の聖性や象徴性を維持・尊重しようとする態度の現れであろう。また、「本殿内部の利用」「寺院躯体の即物的利用」「寺院周囲の仮設的空間化」などは、それに対して、生活上の実用的要求が勝ったことの現れと解釈することができる。

6 まとめ

本論文では、ヒンドゥー教の聖地ヴァーラーナシーの旧市街において観察される、既存のヒンドゥー寺院を核とする増築現象を「融合寺院」と名づけ、その分布や形態的特徴を明らかにしつつ、居住者へのインタビューを通じて現象の生起する背景やプロセス、増築によって取り込まれた寺院への意識などを探り、その現象の概要把握を試みた。

融合寺院と呼びうる寺院は、旧市街中心部の調査範囲に限って見れば、独立した形態をもつ寺院の約4割を占める。このように融合寺院が多数存在することの背景には、歴史的に長い時間をかけてきわめて高密度に発達した旧市街に、ヒンドゥー教の聖地であるゆえに非常に数多くの寺院が存在するという、ヴァーラーナシーの都市固有の状況が前提としてあることは、一見して自明であるがあらためて確認しておきたい。このような状況下の都市空間に強い開発圧力がかかった時、土地利用密度の低いまま残る寺院の土地に開発対象として白羽の矢が立つのは、ある意味では自然であろう。一方で、寺院を維持・存続させようとする力も弱くない。本稿では詳しく論じることができなかったが、ヒンドゥー寺院は原則的には破壊・移転・転用することができない⁹。周辺住民に篤く信仰されている寺院の場合は、周囲からも寺院を残す方向に圧力がかかる。仮に寺院建築に多少手を加える場合も、ポーチはよいが本殿やシカラに手を付けてはいけない、といった制限がかかる。このように、ある寺院のある土地が何らかの開発の対象となった際、開発圧力の強さや寺院を含む土地所有者の意向、寺院の重要度等の諸条件に応じて、異なった対応がとられるのだと考えられる。

開発圧力がきわめて強く、寺院を残す方向の力を大きく上回る場合、ヒンドゥー寺院は破却・移転等されるだろう。現代ではその事例を見聞することはほとんどないが、歴史的には都市にムスリムが大量移入した際に寺院の破却が繰り返行われている。大きな開発要求を満たしつつ寺院の存在は継続するオプションとして、寺院建築を解体した上でより床面積の大きな建物を建設し、その一室に従前の寺院機能を充て運用する方法がありうる。ヴァーラーナシーでは、比較的近年建設されたと考えられる大きな建物の一室（大抵は一階の街路側部分）が由緒あるリングアの祀られた寺院となっている事例が少なくないが、これらはこのような経緯の結果生じた可能性が高い¹⁰。逆に、開発圧力がある程度小さい場合は（たとえば寺院敷地内に寺院管理者が居住用スペースを設ける等）、寺院の周囲に仮設的建築を「付加」といった措置で間に合うであろう（図15）。融合寺院はその中間、一定程度強い開発圧力を受け容れつつ（床面積を大幅に増大させるつつ）、同時に建築を含む寺院を存続させるという条件を満たす手段として現出している。

開発（床面積増大）と寺院の存続という、矛盾する要件を並立させる原因となっているのは、寺院建築の「聖性の揺らぎ」、あるいは「聖性の幅の広さ」とも言うべき性質である。神聖な存在の覆屋としての寺院建築は、日本や諸宗教においてもそうであるように、聖なる存在（に準ずる存在）と見なされる。その一方で、ヒンドゥー寺院において最も重要なのは場所とそれと結びつく神体であり、寺院建築そのものはあまり重要ではないと考えられている。そのような寺院建築の聖性に対する解釈の幅が、寺院建築に一定程度手を加えることを許容しつつ、破壊や過度の改変を抑制し、ここで見てきたような様々な融合形態や使われ方のバリエーションを生んでいると考えられる。

⁹ 日本で言う「精抜き」のように、寺院から神を抜きとる儀式を経て、寺院建築が転用・破却されることもあるが、管見では稀である。

¹⁰ 寺院構造体の痕跡が残っていない場合、その一室に充てられた寺院が、以前からその場所にあった寺院と連続するものか、あるいは新規に設置されたものかを、後日判別するのは困難である。ただし、巡礼対象となっている寺院など数百年の由緒をもつ寺院（リングア）の場合は、前者とみなすことができよう。

参考文献

小倉 泰、「インド世界の空間構造：ヒンドゥー寺院のシンボリズム」、春秋社、1999

橋本泰元・山下博司・宮本久義、「ヒンドゥー教の事典」、東京堂出版、2005

ミッチェル、ジョージ；訳/神谷武夫、「ヒンドゥー教の建築：ヒンドゥ寺院の意味と形態」、鹿島出版会、1993

柳沢 究・布野修司、「ヴァーラーナシー（ウッタル・プラデーシュ州、インド）の都市空間形成と巡礼路および寺院・祠との関係」、日本建築学会計画系論文集、No. 583, pp. 75-82, 2004

Michel, Georget & Singh, Rana P. B., “Banaras: The City Revealed”, Marg Publications, 2006